

地方出版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

随想舎 事始め ——— ★★★ ボクが地方出版をはじめた理由

文・卯木 伸男

加齢なる変身

つい最近、老眼鏡をかけるようになった。今まで掛けていた眼鏡が見えにくくなったので度数をあげたら、今度は手元が見えづらくなってしまったのだ。新聞おろか、読書をするのにも事欠く始末。これでは校正などできるはずがない。ましてやパソコンを見つめていると、肩や首筋が張ってしまい作業効率の低下は著しい。そこで、まだ若いとかっこをつけても仕方ないと覚悟を決め、老眼鏡を掛けるようになったのである。

しかし、思えば齢も50歳を過ぎたのだから老眼鏡も当然と言えば当然。それにこの稼業に入って来年で25年、人よりも我が眼を酷使してきたのだから、むしろ老眼鏡は遅いくらいかもしれない。先だっては重い荷物を持ったわけでもないのに、突然、ぎっくり腰になってしまった。返本の山を前にしての出来事なら笑い話にもなるが、朝、ベッドから起き出したら発症していたというから笑えない。この摩訶不思議な状況に、「加齢なる変身」を遂げたとながら感心している。

こんなボクであるが、年上の友人と2人で随想舎を設立したのは、まだうら若き(?)27歳のとき。友人とは今も生業を共にする長野県生まれの小川修二氏、彼とて37歳の若さだった。知り合ったのは、いまは無き「仮面館」というライブハウス。年齢の差はあるものの妙に馬が合い今日に至っている。そんな彼も還暦を過ぎた。まさに光陰矢の如し。歳月が経つのは早いものだ。

信州で出会った地方出版

ボクは大学の4年間を長野県上田市で



創業1985年、写真は現在の社内風景

過ごした。この4年間がボクの今を決定づけたと言ってよい。その理由は長野県で初めて地方出版なるものを見聞きし、その存在感に驚愕と憧憬を抱いたからである。それまでボクが暮らした栃木県にも地方出版は存在したが、その規模、多種多様なテーマにはどう足掻いてもかなわなかった。

さらに、県都長野市は言うに及ばず、松本、上田、飯田市をはじめ軽井沢町など各地域に出版社があり、野武士のような貫禄を放っていた。また、どこの書店にも地方出版の棚が設けられているのにも驚いた。それは地方から東京に出てきたとき感じたカルチャーショックにも似ていたと思う。

それまでのボクはどちらかと言えば、文筆家志望だった。誤解がないように言っておくが、決して実力があつたわけでも才能があつたわけでもない。ただ、幼いころから作文や本が好きで、大学に入ってから同人誌やミニコミ誌などを発行し、一人悦に入っていただけのことである。そんな中、悪魔のささやき(?)が聞こえてきた。「栃木県に帰っておまえも出版を生業にしたら」「文筆より編集者の方がおもしろいぞ」。日増しにその誘惑は大きくなっていったのだ。

しかし、だからと言って出版社への就職を真剣に考え行動したかというところではない。まったくと言っていいほど、何もしなかった。強いて就活と言えば、大学4年生のときに教授の紹介でタウン誌を創刊するという創業百年近い活版会社に面接へ行つたことを憶えている。今もその会社は健在。小海線沿いの町で地道な出版活動を続けている。

出版社という印刷会社で学んだこと

ボクは就職活動もしないまま大学を卒業し、職人の紹介で宇都宮にある「出版社」と名がついた印刷会社に転がり込んだ。なぜその会社に就職したかと言えば、答えは簡単。安直なようだが、前述した通り単純に出版社希望だったからだ。それにボクは学生結婚で、生まれたばかりの娘がいたから生活費を稼ぐのは至上命題だったのである。社宅住まい、月額8万5千円が初任給だった。

就職はしたものの右も左も分からないことばかり。B4、A5の判型おろか、印刷の仕組みなど分かるはずがない。版下と製版を中心に、それこそ見よう見まねで仕事を覚え、毎月数十時間の残業を黙々とこなした。

しかし、退職するまでの6年間に体得した印刷技術と知識は、いま出版を生業とする上でそれこそ強力な武器になっている。印刷現場を知らない頭でっかちな編集者にならないで本当に良かった。

事務所を開いて四半世紀

さて本題であるが、ボクが随想舎を始めた理由はただひとつ。印刷会社の将来性と就職試験の煩わしさを考えれば、自分で出版社をつくってしまえば簡単だと考えたからだ。家賃1万5千円の畳屋の倉庫の2階を根城に、15万円を2人で出し合い購入したワープロ1台と、定規、カッター、ピンセットが今日の始まりだった。まったく資金も、事業計画もないままのスタートだったのだ。そのせいか、開店

祝いならぬ宴会の席では、『随想舎』が『瞑想者』にならないように」とか、『栃木県で出版は無理。もって1年』と友人たちが真顔で心配してくれたことを昨日のことのように思い出す。

社名は編集プロダクションを意識して、『編集工房随想舎』(随想舎は会社登記から)となづけた。それは当初から闇雲に出版を始めるのではなく、かつての伝手で印刷会社から制作などの仕事を貰いながら

体力がいたら出版を始めようと考えていたからだ。そのため社内の電算システムを構築し、編集から組版、出力まで一貫して行える態勢を整えた。これは宇都宮でも最も早いものだったと思う。

2、3年が経ち自費出版の受注も増え、何とか糊口が凌げるようになったころ出版した第一作が、全国労農大衆党と大日本生産党の武力衝突を描いた『曙光—実録「阿久津村騒擾事件」』だった。たぶん

地方小ともこのころ取引を開始したのだと記憶している。

あれから四半世紀。数えれば出版点数は300点を超えた。自費出版は枚挙に暇がない。事務所も倉庫の2階からビルに移った。社員もボクを含めて7人の所帯が増えた。老眼鏡を掛け、腰を労りながらあと四半世紀は頑張ってみよう。

(うき のぶお・随想舎取締役社長)

新刊ダイジェスト

※価格は総額(税込)表示です。

『童門冬二の歴史に学ぶ智恵』 ●童門冬二著

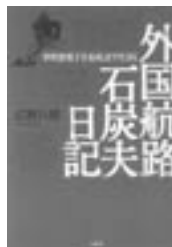


武将、為政者など歴史に名を残した人物が折にふれて発した名言集。民衆のトップに立つ者あるいは各界をリードする人物は常に民衆の心理をつかみ、その動向を補足する努力を怠らない。自己の努力を維持し、継続するため、ある局面では命令し、ときには大衆を説得する必要がある。本書はその名言として伝えられているものがどのような背景から生まれたかを周辺の史実を引用し

ながら解り易く綴っている。そしてこれらの名言は今日でも組織や日常生活のなかで生かされており、ある局面に遭遇したとき自己や組織を鼓舞する金言として引用され大切にされている。座右の書とするのによい。

◆1300円・四六判・239頁・茨城新聞社・茨城・2009/3刊・ISBN978-4-87273-237-5

『外国航路石炭夫日記 —世界恐慌下を最底辺で生きる』 ●広野八郎著



外国航路のマドロスと言えば、スマートに響くが、そこに、言語を絶する過酷な労働があり、惨めで、放縦で、捨て鉢な生活があったことは知る由もないことであった。土地を持たない小作農の家に生れた著者は、僅かな夢を描き、日本郵船インド航路の貨物船秋田丸に、最下級船員火夫見習の職を求める。昭和3年のことだ。やがて、昇進とはいえ辛さは変わらぬ石炭夫となる。熱く狭い

船底で、ひたすらボイラーに石炭を投げ込む日々。その中で、こっそりと、欠かさず書き記した日記。それを支えたのは葉山義樹の文学であり、文化運動であった。自身の労働と船員の生活、経営者の暴虐、港みなどの酒場と娼婦たち。文学として、海上労働史として、赤裸々な描写に圧倒される。

◆2940円・A5判・374頁・石風社・福岡・2009/6刊・ISBN978-4-88344-175-4

『電子出版学入門 —出版メディアのデジタル化と紙の本のゆくえ』 ●湯浅俊彦著



本書のなかの「電子出版の市場規模」によると2006年から2007年にかけて電子書籍市場の売上高はほぼ倍増している。だかその内訳を見るとPC向け市場が微増だったのに対し、携帯電話向けが前年比2.5倍と急拡大しているのがわかる。今や電子書籍市場の中心は携帯電話に移行しているのだが、現在はこれに加えて iPod touch や PSP、ニンテンドー DS といった携帯ゲーム機

が注目されていて、本書ではその詳細も押さえている。一方大手家電メーカーが投入した読書専用端末が相次いで市場から撤退したのは記憶に新しい。CD-ROMの登場からゲーブルブック検索訴訟まで、電子書籍の歴史をまとめるとともに、「電子出版学」を提唱、電子書籍年表も付す。

◆1260円・A5判・118頁・出版メディアパル・東京・2009/6刊・ISBN978-4-902251-17-3

『邂逅の山、憧憬の峰 —上高地からシャモニへ』 ●藤原岩造著



一昔前、この写真集の作者と同世代の山屋はリンホフやハッセル、ローライなど高価なカメラを手に入れば迫力ある全紙大写真を物にできた。しかしカメラに資金をつぎ込む余裕がなかった。今なら無理なく性能の良いカメラを手に入れる。だが被写体の画像には撮影者の内面が表現される。果たして彼らがこの作者と同じ美しい画像を捉え得たかどうかは分からない。この作品集のような

画像を大勢のプロ写真家も発表してはいる。しかし、中には思い込みの故に美的センスに疑問を抱かせるものもある。更にこの美しい写真集の魅力を倍加させたのは定価の安さだ。同じ場所に思い出を持つ者には得難い本と言えよう。

◆1890円・200mm×220mm判・71頁・ムーンプレス・東京・2009/6刊・ISBN978-4-902498-17-2

売行良好書

期間：2009年6月16日～7月15日

〔出荷センター扱い〕※税込み価格

- (1) 『作っておくと、便利なおかず』 1260円・ベターホーム出版局
- (2) 『イエスの涙』 1995円・アートヴィレッジ
- (3) 『ゆりちかへ』 1365円・書肆侃侃房
- (4) 『おかしな おかしな おかしのはなし』 1575円・リーブル
- (5) 『ふんコロ昆虫記』 2100円・トンボ出版
- (6) 『絵本を読んであげましょう』 1200円・絵本で子育てセンター
- (7) 『子どもを生きれば おとなになれる』 2100円・アスク・ヒューマン・ケア
- (8) 『絶景・珍景 ニッポン百景』 1050円・アートヴィレッジ
- (9) 『自然農・栽培の手引き』 2100円・南方新社
- (10) 『自閉症の子どもたちの生活を支える』 1575円・筒井書房
- (11) 『決戦！ 八王子城』 735円・揺籃社
- (12) 『左官礼讃2』 2310円・石風社



〔三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書〕※税込み価格

- (1) 『決戦！ 八王子城』 735円・揺籃社
- (2) 『東京かわら版 No. 427』 420円・東京かわら版
- (3) 『新装改訂版 信州の城と古戦場』 1470円・しなのき書房
- (4) 『男子にオススメの少女マンガ大百科』 400円・スモール出版
- (5) 『なまら蝦夷 7号』 800円・松岡つとむ
- (6) 『WALK 58』 720円・水戸芸術館
- (7) 『幕末の外交官 森山栄之助』 1890円・弦書房
- (8) 『満州・重い鎖』 2205円・弦書房
- (9) 『北関東川紀行(鮫) 鬼怒川・小貝川・渡良瀬川』 1575円・随想舎
- (10) 『中原中也と維新の影』 2310円・弦書房

〔ジュンク堂書店新宿店—センター扱い図書〕※センター出荷データより/税込み価格

- (1) 『今夜もイエーイ』 1680円・本の雑誌社
- (2) 『SF本の雑誌』 1575円・本の雑誌社
- (3) 『ari vol. 1』 490円・康朝美
- (4) 『ari vol. 2』 490円・康朝美
- (5) 『広告批評 No. 336』 1260円・マドラ出版
- (6) 『予備校に行っている人は読まないでください』 1365円・宮帯出版社
- (7) 『日々 07』 735円・アトリエ・ヴィ
- (8) 『nobody ISSUE 30』 1260円・nobody編集部
- (9) 『東京かわら版 No. 427』 420円・東京かわら版
- (10) 『ふんコロ昆虫記』 2100円・トンボ出版

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
<http://www.bekkoame.ne.jp/~much/>

トピックス — ★★★


▼第22回地方出版文化功労賞決定

昨秋に開催されたブックインとっとり2008出品作品の中から、第22回地方出版文化功労賞が選ばれ、発表となりました。今回は、功労賞及び特別賞に『医者、用水路を拓く—アファンの大地から世界の虚構に挑む』(中村哲著・石風社・1890円)、奨励賞に『それゆけ小学生！ボクたちの世界一周』(かやのたかゆき&ひかる著・石風社・1890円)と、福岡の石風社さんがダブル受賞となりました。ここ2年間で見てみると、この『アクセス』の新刊ダイジェストで取り上げられた件数で石風社さんが6件と一番多い(以降、秋田県の無明舎出版さんや福岡の弦書房さんが5件と続いている)ことから見ても、やはり良質の新刊がたくさん刊行され、紹介や書評の対象として取り上げるにふさわしい内容であるということで、今回のダブル受賞もそれを反映していると言ってよいでしょう。同社から刊行されている中村氏の著書はこれまでも本賞の候補に挙がりながらも、各地域の歴史や民俗等に素材を採った地方出版の激励や奨励といった本賞の趣旨から、他の作品に席を譲ってきたという経緯があったとのこと。質の高さを認めつつも今回も見送るべきという意見がありながらも、議論の結果今回の受賞決定となったそうです。また当初から中村氏の著書を発表し、中村氏属するペンクラブの日本事務局ともなっている石風社さんの出版活動に敬意を表し、特別賞が併せて贈られることとなりました。

郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先(郵便番号、住所)、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
 - ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。(メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。)お急ぎの方、その他ご要望がございました場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
 - ◎なお書籍お買上総計(税抜き価格)が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター
 F A X : 0 3 - 3 2 3 5 - 6 1 8 2

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM～8:00 PM
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
 TEL. 03-3233-3312(代)
 URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

**営業の
ごあんない**

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

